69 大沢宿～今市宿

栃木県日光市

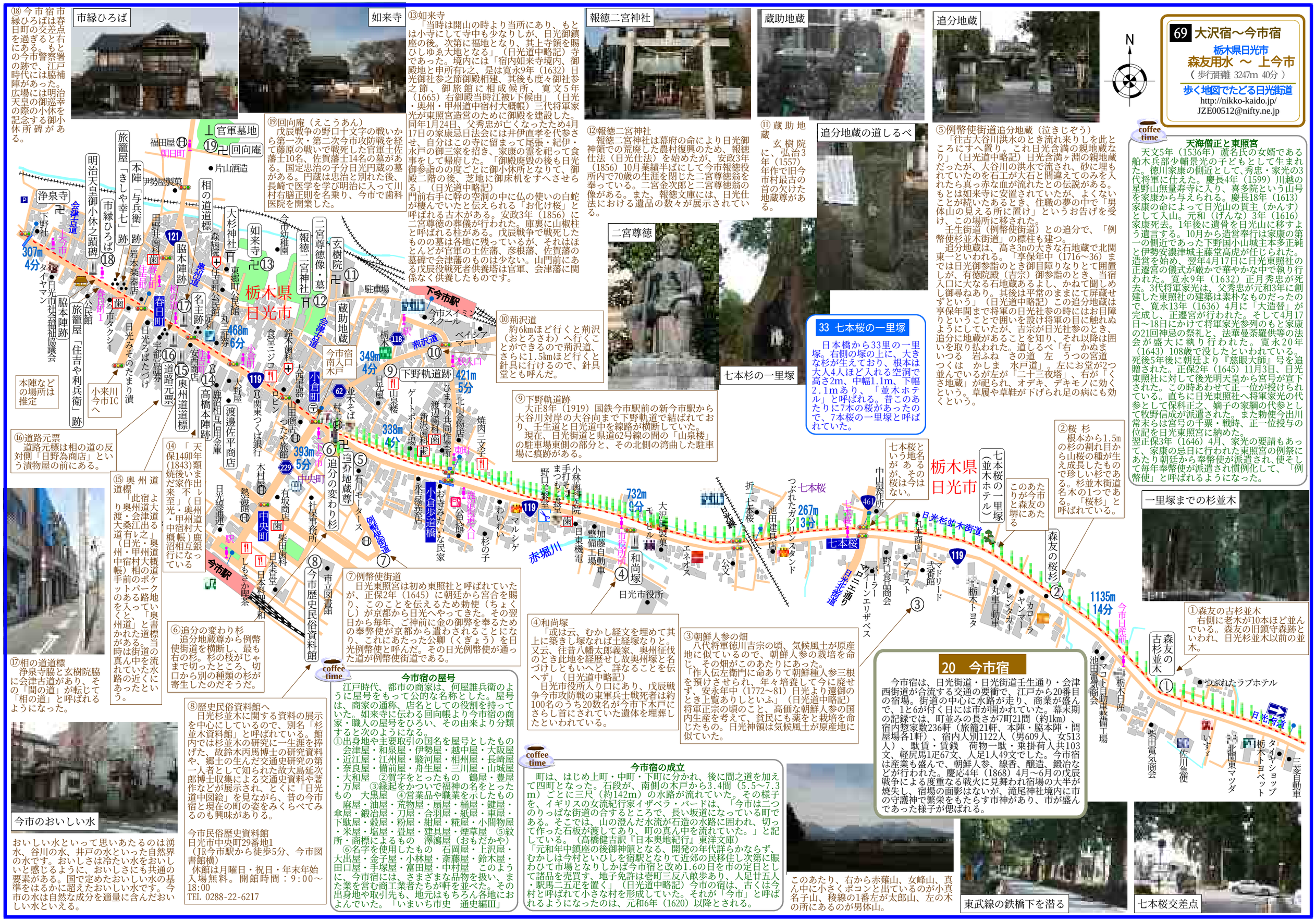
森友用水 ～ 上今市

（ 歩行距離 3247m 40分 ）

歩く地図でたどる日光街道

http://nikko-kaido.jp/

JZE00512@nifty.ne.jp



⑱ 今市宿 市縁ひろばは春日町の交差点を過ぎるとも右と日光市の警察署の跡で、江戸時代には脇本陣があった。広場には明治天皇の御巡幸の際の小休を記念する御小休所碑がある。

市縁ひろば

如来寺

⑲回向庵（えこうあん）
戊辰戦争の野口十文字の戦いから第一次・第二次今市攻防戦を経て藤原の戦いで戦死した官軍士佐藩士10名、佐賀藩士14名の墓がある。国定忠治の子分日光円蔵の墓がある。円蔵は忠治と別れた後、長崎で医学を学び明治に入って川村右膳正則を名乗り、今市で歯科医院を開業した。

⑬如来寺
「当時は開山の時より当所にあり、もとは小寺にして寺中も少なりしが、日光御鎮座の後。次第に福地となり、其上寺領を賜ひしゆゑ大地となる」（日光道中略記）寺であった。境内には「宿内如来寺境内、御殿地と申所有レ之、是は寛永9年（1632）日光御社参之節御殿相建、其後も度々御社参之節、御旅館に相成候所、寛文5年（1665）右御殿当時江被レ下候由」（日光・奥州・甲州道中宿村大概帳）三代将軍家光が東照宮造営のために御殿を建設した。同年1月24日、父秀忠が亡くなったため4月17日の家康忌日法会には井伊直孝を代参させ、自分はこの寺に留まって尾張・紀伊・水戸の御三家を招き、家康の霊を祀って食事をして帰府した。「御殿廃毀の後も日光御参詣のの度ごとに御小休所となりて、御殿二階の後、芝地に御床机をすへさせらる」（日光道中略記）
門前右手に幹の空洞の中に仏の使いの白蛇が棲んでいたと伝えられる「お化け桜」と呼ばれる古木がある。安政3年（1856）に二宮尊徳の葬儀が行われた。庫裏に山椒柱と呼ばれる柱がある。戊辰戦争で戦死したものの墓は各地に残っているが、それはほとんどが官軍の士佐藩、彦根藩、佐賀藩の墓碑で会津藩のものは少ない。山門前にある戊辰役戦死者供養塔は官軍、会津藩に関係なく供養したものです。

報徳二宮神社

⑫報徳二宮神社
報徳二宮神社は幕府の命により日光御神領での荒廃した農村復興のため、報徳仕法（日光仕法）を始めたが、安政3年（1856）10月業績半ばにして今市報徳役所内で70歳の生涯を閉じた二宮尊徳翁を奉っている。二宮金次郎と二宮尊徳翁の像がある。また、報徳文庫には、日光仕法における遺品の数々が展示されている。

蔵助地蔵

⑪蔵助地蔵
玄樹院に、弘治3年（1557）年作で旧今市村最古の首の欠けた地蔵尊がある。

追分地蔵

追分地蔵の道しるべ

⑤例幣使街道追分地蔵（泣きじぞう）
「往古大谷川洪水のとき流れ来りしを此ところにすへ置り。これ日光含満の親地蔵なり」（日光道中略記）日光含満ヶ淵の親地蔵だったが、大谷川の洪水で流され、砂に埋もれていたのを石工が大石と間違えてのみを入れたら真っ赤な血が流れたとの伝説がある。もとは如来寺に安置されていたが、よくないことが続いたあるとき、住職の夢の中で「男体山の見える所に置け」というお告げを受け、この場所に移された。
壬生街道（例幣使街道）との追分で、「例幣使杉並木街道」の標柱も建つ。
追分地蔵は、高さ3mの大きな石地蔵で北関東一といわれる。「享保年中（1716～36）までは日光御参詣のとき御目障りなりとて囲置しが、有徳院殿（吉宗）御参詣のとき、当宿入口に大なる石地蔵あるよし、かねて聞しめし御尋ねあり。其後は平常のままにて屏蔵せずという」（日光道中略記）この追分地蔵は享保年間まで将軍の日光社参の時にはお目障りということで囲いを設け将軍の目に触れぬよう にしていたが、吉宗が日光社参のとき、追分に地蔵があることを知り、それ以降は囲いを取り払われた。道しるべ「右　かぬま　いつぬま　岩ふね　さの道　左　うつの宮道　つくは　かしま　水戸道」。左にお堂が2つ並んでいるが左が「二十三夜塔」、右が「くさ地蔵」が祀られ、オデキ、デキモノに効くという。草履や草鞋が下げられ足の病にも効くという。

二宮尊徳

七本杉の一里塚

33 七本桜の一里塚

日本橋から33里の一里塚。右側の塚の上に、大きな杉が生えており、根本は大人4人ほど入れる空洞で高さ2m、中幅1.1m、下幅2.1mあり、「並木ホテル」と呼ばれる。昔このあたりに7本の桜があったので、7本桜の一里塚と呼ばれていた。

⑩荊沢道
約6kmほど行くと荊沢（おとろさわ）へ行くことができるので荊沢道、さらに1.5kmほど行くと針具に行けるので、針具堂とも呼んだ。

⑨下野軌道跡
大正8年（1919）国鉄今市駅前の新今市駅から大谷川対岸の大谷向まで下野軌道で結ばれており、壬生道と日光道中を線路が横断していた。
現在、日光街道と県道62号線の間の「山泉楼」の駐車場東側の部分と、その北側の湾曲した駐車場に痕跡がある。

⑯道路元票
道路元標は相の道の反対側「日野為商店」という漬物屋の前にある。

⑰相の道道標
浄泉寺脇と玄樹院脇に会津古道があり、その「間の道」が転じて「相の道」と呼ばれるようになった。

⑭「天保14年（1843）類焼後いま出来た家作（奥州・甲州道中宿村大概帳）焼だ来至光・中沼相互信用金庫概沼行ていた」

⑮奥州道標「此宿より大道道津出る」「奥州道概道会江レ之ケ光・甲州大鹿銀行有レ光・甲州村相のポ渡大道（日光・奥州道中宿村大概帳）相にいる手前のトパーク路ある入って入と、「道」のを く州地いかれた奥書標当がある。時は街道の流水に真れ道中を流ていたくいた路のあったい。

⑥追分の変わり杉
追分地蔵尊から例幣使街道を横断し、最も右の杉。杉の枝がじゃまで切ったところ、切口から別の種類の杉が寄生したのだそうだ。

⑦例幣使街道
日光東照宮は初め東照社と呼ばれていたが、正保2年（1645）に朝廷から宮合を賜ぐ、このことを伝えるため勅使（ちょくし）が京都から日光へやってきた。その翌日から毎年、ご神前に金の御幣を奉るための奉幣使が京都から遣わされることになり、これにあたった公卿（くぎょう）を日光例幣使と呼んだ。その日光例幣使が通った道が例幣使街道である。

④和尚塚
「或は云、むかし経文を埋めて其上に築きし塚なれば土経塚なりと。又云、往昔八幡太郎義家、奥州征伐のとき此地を経歴せし故奥州塚と名づけしともいへど、詳なることを伝へず」（日光道中略記）
日光市役所入り口にあり、戊辰戦争今市攻防戦の東軍兵士戦死者は約100名のうち20数名が今市下木戸にさらし首にされていた遺体を埋葬したといわれている。

③朝鮮人参の畑
八代将軍徳川吉宗の頃、気候風土が原産地に似ているので、朝鮮人参の栽培を命じ、その畑がこのあたりにあった。
「作人伝左衛門に命ありて朝鮮種人参三根を預けさせられ、年々培養して今に廃せず、安永年中（1772～81）日光より還御のとき上覧ありしといふ」（日光道中略記）
将軍正宗の頃のこと、高価な朝鮮人参の国内生産を考えて、貧民にも薬をと栽培を命じたもの。日光神領は気候風土が原産地に似ていた。

20 今市宿

今市宿は、日光街道・日光街道壬生通り・会津西街道が合流する交通の要衝で、江戸から20番目の宿場。街道の中心に水路が走り、商業が盛んで、1と6が付く日には市が開かれていた。幕末期の記録では、町並みの長さが7町21間（約1km）、宿内惣家数236軒（旅籠21軒、本陣・脇本陣・問屋場各1軒）、宿内人別1122人（男609人、女513人）、駄賃・賃銭　荷物一駄・乗掛荷人共103文、軽尻馬1疋67文、人足1人49文でした。今市宿は産業も盛んで、朝鮮人参、線香、醸造、鍛冶などが行われた。慶応4年（1868）4月～6月の戊辰戦争による度重なる戦火に見舞われ宿場の大半が焼失し、宿場の面影はないが、滝尾神社境内に市の守護神で繁栄をもたらす市神があり、市が盛んであった様子が偲ばれる。

七本桜と名るのは今はないが、その桜はない。

七本桜の一里塚（並木ホテル）

栃木県日光市

このあたり市のあた今友あこのが森にこりと堺る

②桜 杉
根本から1.5mの杉の割れ目から山桜の種が生え成長したもので珍しい杉である。杉並木街道の名である。「桜杉」呼ばれている。

一里塚までの杉並木

①森友の古杉並木
右側に老木が10本ほど並んでいる。森友の旧鎮守森跡といわれ、日光杉並木以前の並木。

coffee time 天海僧正と東照宮

天文5年（1536年）蘆名氏の女婿である船木氏部少輔景光の子どもとして生まれた。徳川家康の側近として、秀忠・家光の3代将軍に仕えた。慶長4年（1599）川越の星野山無量寿寺に入り、喜多院という山号を家康から与えられる。慶長18年（1613）家康の命によって日光山の貫主（かんす）として入山。元和（げんな）3年（1616）家康死去。1年後に遺骨を日光山に移すよう遺言する。10月から造営奉行は家康の第一の側近であった下野国小山城主本多正純と伊勢安濃津城主藤堂高虎が任じられた。造営を始め、翌年4月17日に日光東照社の正遷宮の儀式が厳かで華やかな中で執り行われた。寛永9年（1632）正月秀忠が死去。3代将軍家光は、父秀忠が元和3年に創建した東照社の建築は素朴なものだったので、寛永13年（1636）4月に「大造替」が完成し、正遷宮が行われた。そして4月17日～18日にかけて将軍家光参列のもと家康の21回神忌の祭礼と、法華曼荼羅供等の法会が盛大に執り行われた。寛永20年（1643）108歳で没したといわれている。死後5年後に朝廷より『慈眼大師』号を追贈された。正保2年（1645）11月3日、日光東照社に対して後光明天皇から宮号が宣下された。この時あわせて正一位が授けられている。直ちに日光東照社へ将軍家光の代参として保科正之、嫡子の家綱の代参として牧野信成が派遣された。また勅使今出川常末らは宮号の千票・戦時、正一位授与の位記を日光東照宮に納めた。
翌正保3年（1646）4月、家光の要請もあって、家康の忌日に行われた東照宮の例祭にあたり朝廷から奉幣使が派遣され、使そして毎年奉幣使が派遣され慣例化して、「例幣使」と呼ばれるようになった。

今市のおいしい水

おいしい水といって思いあたるのは湧水、谷川の水、井戸の水といった自然界の水です。おいしさは冷たい水をおいしいと感じるように、おいしさにも共通の要素がある。国で定めたおいしい水の基準をはるかに超えたおいしい水です。今市の水は自然な成分を適量に含んだおいしい水といえる。

⑧歴史民俗資料館へ
日光杉並木に関する資料の展示を中心にしているので、別名「杉並木資料館」と呼ばれている。館内では杉並木の研究に一生涯を捧げた、故鈴木丙馬博士の研究資料や、郷土の生んだ交通史研究の第一人者として知られた故大島延次郎博士収集による交通史資料や著作などが展示され、とくに「日光道中図絵」を見ながら、昔の今市宿と現在の町の姿をみくらべてみるのも興味がある。

今市民俗歴史資料館
日光市中央町29番地1
（JR今市駅から徒歩5分、今市図書館横）
休館は月曜日・祝日・年末年始
入場無料。開館時間：9:00～18:00
TEL 0288-22-6217

coffee time 今市宿の屋号

江戸時代、都市の商家は、何屋誰兵衛のように屋号をもって公的な名称とした。屋号は、商家の通称、店名としての役割を持っていた。如来寺に伝わる回向帳より今市宿の商家・職人の屋号をひろい、その由来より分類すると次のようになる。
①出身地や主要取引の国名を屋号としたもの　会津屋・和泉屋・伊勢屋・越中屋・大阪屋・近江屋・江州屋・駿河屋・相州屋・長崎屋・奈良屋・備前屋・舟生屋・三川屋・山城屋・大和屋　②賀字をとったもの　鶴屋・豊屋・万屋　③縁起をかついで福神の名をとったもの　大黒屋　④営業品や職業を示したもの　麻屋・油屋・荒物屋・扇屋・桶屋・鍵屋・傘屋・鍛冶屋・刀屋・合羽屋・紙屋・車屋・下駄屋・穀屋・粉屋・紺屋・糀屋・小間物屋・米屋・塩屋・畳屋・建具屋・煙草屋　⑤紋所・商標によるもの　澤瀉屋（おもだかや）
⑥名字を使用したもの　石岡屋・上沢屋・大出屋・金子屋・小林屋・斎藤屋・鈴木屋・田口屋・手塚屋・富田屋・中村屋　このように、今市宿には、さまざまな品物を扱い、また業を営む商工業者たちが軒を並べた。その出身地や取引先も、地元はもちろん各地におよんでいた。「いまいち市史　通史編Ⅲ」

coffee time 今市宿の成立

町は、はじめ上町・中町・下町に分かれ、後に間之道を加えて四町となった。石段が、南側の木戸から3.4間（5.5～7.3m）ごとに三尺（約142m）の水路が流れていた。その様子を、イギリスの女流紀行家イザベラ・バードは、「今市は二つのりっぱな街道の合するところで、長い坂道になっている町である。そこでは、山の澄んだ水流が石造の水路に囲われ、切って作った石板が渡してあり、町の真ん中を流れていた。」と記している。（高橋健吉訳『日本奥地紀行』東洋文庫）
「元和年中鎮座の後御神領となる、開発の年代詳らかならず、むかしは今村といひしを宿駅となりて近郊の民移住し次第に賑わひて市場となりしかば今市宿と改め1.6の日を市の定日として諸品を売買す、地子免許は壱町三反八畝歩あり、人足廿五人・駅馬二五疋を置く」（日光道中略記）今市の宿は、古くは今村と呼ばれて小さな村を形成していた。それが「今市」と呼ばれるようになったのは、元和6年（1620）以降とされる。

このあたり、右から赤薙山、女峰山、真名子山、稜線の1番左が太郎山、左の木の所にあるのが男体山。

東武線の鉄橋下を潜る

七本桜交差点